

年頭所感

「コロナ禍の学会運営 - With コロナの時代を迎えて -」



日本膜学会会長
九州大学 後藤雅宏

皆様におかれましては健やかな新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は、新型コロナウイルス感染症（以後コロナ）に翻弄された一年でした。4月7日に発令された初の緊急事態宣言で、日本中の人々がこれまでにない行動制限を強いられました。ほとんどの大学で、構内への立ち入りが一時的に禁止され、研究室での研究活動が完全にストップしました。まるで映画のような世界を目の当たりにすることになるとは、誰がこのような事態を予想したでしょうか？感染症の怖さを身にしみて知った一年でした。私自身正直11月の膜シンポまでにはコロナも終息するだろうと高を括っていましたが、その甘い予測は見事に外れ、終息の見込みは未だ全く立っていません。このような状況下、いずれの学会もコロナといかにうまく付き合っていくかが重要となってきました。年頭にあたり、昨年の膜学会の様子を振り返りながら、恒例の会長所感を述べさせていただきます。

1. 年会と膜シンポジウムについて

学会で最も重要な行事は、学会主催の学術発表会です。昨年の42年会は、コロナの影響で誌上開催（実質中止）となりました。組織委員長の野村先生、副委員長の松木先生のもと様々な魅力あるシンポジウムが企画されていましたが、大変残念な結果となりました。なお、一部のシンポジウム企画（水処理関係）は、本年6月開催予定の43年会で再構成しての発表が予定されています。

その後、日本中で急速にオンライン会議システムが広まりました。Zoom, Teams, Webexの3本柱をはじめとした様々なオンラインシステムが普及し、大学の講義のほとんどがオンライン授業となりました。膜学会が昨年4月1日に法人化して最初の理事会も4月25日にZoomで行ったことを鮮明に覚えています。概ね、3月～6月にかけての主要学会は中止（誌上開催）になりましたが、9月以降の秋の大会に向けて、各学会はオンライン形式の発表会の開催を模索しました。ただ、学会のオンライン開催に向けての最大の課題は、発表会の基盤となるオンラインシステムの導入でした。その当時は、学会の主催者もオンライン会議の開催に慣れておらず、オンライン会議を請け負うイベント会社へ丸投げの学会も多数存在しました。中には、オンラインシステムだけで、数百万円も投じた学会もあると聞いています。9月の学会シーズンを終えると、皆さんが少なからずオンライン学会に慣れてきて、誰もが違和感なく参加できるような状態になってきました。

このような状況下、昨年の膜シンポジウムは、滋賀医科

大の寺田運営委員長のもと、11月12日から2日間、早稲田大学にコントロールセンターを設けてオンラインで開催されました。参加数の減少が懸念されましたが、170名と例年とほぼ変わらない数の皆様にご参加頂きました。「ブレイクスルー」を掲げた本大会では、オンラインにもかかわらず大変活発な討論が繰り広げられ成功裏に終えることができました。関係の皆様にご心より感謝申し上げます。なお、本シンポジウムでは、化学工学会のZoomを利用したオンラインシステムを安価に使用することができました。システムの設定にご尽力頂きました野村先生、コントロールセンターの設置にご協力頂きました松方先生にこの場を借りて厚くお礼を申し上げます。なお今年の膜シンポジウム2021は、新潟大の田中運営委員長のもと、11月16日～17日に神戸大学で開催されますので、皆様ご予定ください。また今年の43年会も松方先生のご尽力で早稲田大学にて6月4日～5日の日程を確保することができました。現在、組織委員長の松木先生、副委員長の比嘉先生のもと様々なシンポジウムが企画されているところです。コロナの状況によって、オンラインあるいはハイブリッド開催も検討予定ですが、是非、多くの会員の皆様にご参加頂ければ幸いです。

2. 学会HPと膜誌の充実

新たに導入された年会とシンポジウムのHPシステムが順調に稼働しています。学会の講演申し込みや参加申し込みが全てHPのWeb上で可能となり、大変便利になりました。ただ、会員の皆様からの要望が多い、クレジットカードによる決済は、今後の課題です。昨年、年会やシンポジウムの要旨集をHPにアーカイブスとして残し、会員はいつでも自由に閲覧できるような仕組みの構築を目標に掲げました。現在、試運転中ですが、もう直ぐ可能となる予定です。また、昨年から新たに原著論文のオープンアクセス化が実現しました。さらに、3年後に公開された総説・解説記事には、大変多くのアクセス数が記録されています。原著論文数は、なかなか向上しませんが、昨年より個人の総説投稿を受け付けることにいたしました。博士論文執筆でまとめた解説記事を書けそうな学位取得後の若手研究者あるいは自分の研究の一区切りとしてまとめた総説を発表したい研究者の皆様、是非奮っての投稿をお待ちしています。その他、留学体験記や最新トピックスの紹介記事など、膜誌のさらなる充実のための新しい企画もお寄せいただければ幸いです。

3. 定着したメールマガジン

法人化後に会員サービスの一環として、新たにメルマガ（メールマガジン）を始めました。学会事務局の渡部様の強力なご支援のもと、昨年4月より既に24回のメルマガを発信しました。メルマガでは、毎号発刊された膜誌の内容をはじめ年会、シンポジウム、国際会議の情報などをできるだけ会員の皆様にタイムリーにお届けすることを目標にしています。会員の皆様からは、学会の様々な行事関係の情報提供に関して、大変好評をいただいております。会員の皆様も、このメルマガに掲載希望の情報がございましたら、事務局までお知らせ頂ければ幸いです。採用関係の公募情報なども今後メルマガでお知らせできればと考えています。

4. ICOM2023の日本開催に向けて

日本膜学会が関わる大きな国際会議として、アジア環太平洋のAMSと世界膜会議ICOMがごぞいます。昨年ロンドンで7月に開催予定のICOM2020は、結局12月に延期されましたが、コロナの影響で現地開催が叶わず、オンライン開催となりました。日本との時差が9時間ありますので、国際会議における運営の難しさを痛感しました。次のICOM2023は、山口先生を組織委員長として日本（幕張）開催が決定しています。当学会としましても、日本の膜学のプレゼンス向上に重要な機会と存じますので、大会の成功に向けて全面的にサポートしたいと考えています。

5. 産業部門の活性化と若手研究者の育成

本学会では、年会やシンポジウムにも、多くの企業研究者に参加頂いています。産学連携は非常に重要であり、本学会が産業界の皆様にも有益な学会とっていただけるような活動を行うことが重要です。2018年の40年会ではじめて企業セッションが導入され、さらに2019年の年会およびシンポジウムでは、新たにフラッシュプレゼンテーションの機会が設けられました。今後は、産業部門委員会の皆様と連携して、アカデミアおよび企業会員双方に有益な企画を追加していきたいと考えています。一方で、いずれの学会も学会員の高齢化が指摘されています。学会の活性化には、若手の研究者の活躍が欠かせません。本会として、若手研究者の声に耳を傾け、要望をしっかりサポートして参りたいと思っています。

コロナ禍の中、従来行っていた収益事業が中止となり、事業収入の落ち込みが気になるころではございますが、一方で、会議費や旅費削減などの思わぬメリットもございます。残念ながら、長い期間飲食を伴う交流ができない日々が続いています。Withコロナの時代を迎え、会員交流の新たな仕組み作りの必要性も強く感じております。一日も早くコロナが終息し、皆さんと再びこれまでのように懇親会が行える日が来ることを切に願っております。本年も皆様からの温かいご支援、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。